

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K10573

研究課題名（和文）根拠のある看護（EBN）のための情報リテラシー能力体系表の開発

研究課題名（英文）Development of information literacy ability system table for Evidence Based Nursing(EBN)

研究代表者

山本 千代 (Yamamoto, Chiyo)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教

研究者番号：90834672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、根拠のある看護（Evidence based Nursing以下EBN）のためのIL体系表を開発し、その信頼性・妥当性を検証することである。

研究1では、看護師の情報活用行動の実態を明らかにした。研究2では、看護師が根拠のある臨床看護実践のために必要なILプロセスを5つに分類し、各プロセスの行動指標を3段階51項目で示した。研究3では、作成した体系表の構成概念妥当性および信頼性の検証を実施した。しかし、信頼性を確保していることは確認できたが、開発した体系表の因子構造を確認することはできなかった。今後、因子分析の結果もふまえ、さらなる信頼性と妥当性を検証する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、看護師の看護実践における情報活用行動を明らかにしたことである。さらに、この結果をもとに、根拠のある臨床看護実践のためのIL体系表を作成した。

本研究の社会的意義は、看護師自身がILを客観的に評価することが可能になったことである。

また、今後、IL体系表を活用して、看護師が不足している行動指標を補うような自己学習に取り組むことや、組織が所属する看護師に不足している行動指標を充足するための教育プログラムの計画・実施することで、看護師のIL向上へと導くことにつながることを期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an IL system chart for Evidence based Nursing (EBN) and to test its reliability and validity.

Study 1 revealed the actual state of nurses' information utilization behavior. In Study 2, the IL processes that nurses need for evidence-based clinical nursing practice were classified into five categories, and the behavioral indicators for each process were presented in 51 items on three levels.

In Study 3, the construct validity and reliability of the created systematic tables were verified. However, although we were able to confirm that the reliability was ensured, we were unable to confirm the factor structure of the developed systematic table. In the future, further reliability and validity should be verified based on the results of factor analysis.

研究分野：看護教育学

キーワード：情報リテラシー 情報活用行動 根拠のある看護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

根拠のある看護 (Evidence based Nursing 以下 EBN) とは、直面する看護問題を特定し、エビデンスの元となる情報を収集し、収集した情報の批判的吟味を行い、その結果を臨床看護へ適用する一連の行動指針である (西山 2001)。EBN は「エビデンス」「臨床の専門性 (臨床家の専門的な技術と知識)」「患者の意向 (好み)」「資源 (コスト、人的資源など)」の 4 つの要素が必要とされている (阿部 2004)。この 4 要素のひとつであるエビデンスについて、EBN では研究成果を実践で活用することを重要視している (西山 2001)。阿部 (2004) は EBN について、これまでエビデンスを「つくる」ための看護研究に焦点があてられていたが、エビデンスを「探す」という文献の探し方、さらにはその文献の批判的吟味の仕方、そしてエビデンスを臨床で「使う」という部分は看護基礎教育や看護継続教育で十分だったとはいえないことを指摘している。また、EBN に関する研究報告 (遠藤ら 2009, 上村ら 2004, 松岡, 濱吉 2010) では、EBN が困難である要因として、情報入手のための文献検索の困難を指摘していた。

看護師は、実践した看護について期待した効果が得られなかった時や経験したことがない看護を実践する時に困難を感じていた。こういった困難な場面に遭遇したとき、その解決法として主に、職場内の先輩や同僚に相談していた (岩崎, 渡部 2014, 日高, 新田 2014, 名取ら 2018, 滝島 2017)。一方、困難の解決法を探索する手段として、先行研究やガイドラインなどのエビデンスを使用したという結果はなかった。EBN において、看護師はチームメンバーと相談して考えた解決法が、エビデンスに基づいたものなのかを検討することが重要となるが、その検討が十分に行われていない現状が示唆された。

近年、ICT が発達し、様々な情報に簡単にアクセスすることが可能になった反面、膨大な情報から正しい情報を選択する能力、情報リテラシー (Information Literacy 以下 IL) が求められるようになった。2000 年以降、IL 教育が初等教育から行われるようになり、教育学分野において IL に関する先行研究が報告されている (本間, 2018; 松波ら, 2007; 松山・中島, 2017; 梅澤, 2017)。看護学関連の IL に関連する先行研究は、ヘルスリテラシーに関するものが大半であり、IL に関する先行研究は少なかった。数少ない先行研究 (細田ら 2007, 松崎 2004, 森井 2017) では、看護基礎教育を対象としており、看護師を対象とした IL に関する報告は見当たらなかった。現在、看護師に求められる IL を明示したものは国内には存在していない。

文献検索における ICT 使用に関する報告 (坂下ら, 2013) はあるが、看護師が看護実践に必要な情報を収集する目的で ICT をどのように活用しているのかを調査した報告は見当たらなかった。

日本では、アメリカやヨーロッパの IL 基準を参考に、国立大学図書館協会が「高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年版」を明示している。IL は個人の経験によって習得され、継続的で全体的なプロセスであり、多くの場合、同時進行の活動またはプロセスである。このプロセスを繰り返しながら IL は習得され、基礎的なレベルから次第に高いレベルへ移行するというスパイラルアップ (らせんを描く向上) の要素を持つ (SCONUL 2011, ACRL 2000, 国立大学図書館協会 2015)。

## 2. 研究の目的

根拠のある臨床看護実践のための IL 体系表を開発し、その信頼性・妥当性を検証する。この目的は、以下の 3 つの研究課題の遂行により達成する。

- 1) 看護師の情報活用行動の現状を明らかにする
- 2) 明らかになった情報活用行動の現状をもとに、根拠のある臨床看護実践のための IL 体系表を開発する
- 3) 開発した根拠のある臨床看護実践のための IL 体系表の信頼性と妥当性の検証を行う

## 3. 研究の方法

### 【研究 1】根拠のある臨床看護実践のための情報活用行動の現状を明らかにする

看護師の現状から根拠のある臨床看護実践のための情報活用行動の実際を把握するため、多様な看護師にインタビュー調査を実施した。対象看護師に、日常的な看護実践において、看護上の問題を認識したときの ICT を用いた情報活用行動および、看護師が考える EBN のための IL の必要条件について、インタビューガイドに基づいた半構造化面接を実施した。

分析方法は、対象者に同意を得て録音したインタビューから逐語録を作成した。逐語録は、看護師の情報活用行動のプロセスに沿って記述した。看護師の情報活用行動と、その行動の根拠となる看護師の考え、EBN のための IL の必要条件が語られている文章・段落を、文脈上で意味内容を損なわないようにコード化した。次に、国立大学図書館協会「高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年版 (<https://www.janul.jp/j/projects/sft1/sft1201503b.pdf>)」に示された「高等教育のための情報リテラシー活用体系表 (以下、体系表)」をもとに、コードを類似の意味内容ごとに分類し、それらの内容を忠

実に反映したカテゴリー名をつけた。

分類に活用した体系表とは、情報活用行動プロセスを6つの場面(1.課題を認識する、2.情報探索を計画する、3.情報入手する、4.情報を分析・評価し、整理・管理する、5.情報を批判的に検討し知識を再構造化する、6.情報を活用・発信しプロセスを省察する)に分け、各場面での学習者が取るべき行動を指標とし、基礎・応用・発展の3つのレベルで示したものである。

本調査は、研究者所属機関の倫理審査を受けて実施された。

#### 【研究2】根拠のある臨床看護実践のためのIL体系表の開発

研究1で明らかとなった看護師の情報活用行動の現状に基づき、そのプロセスと行動指標を、国立大学図書館協会(2015)が示した体系表に検討・配置し、根拠のある臨床看護実践のためのILとして体系表を作成した。

そして、作成した体系表の内容的妥当性を検討するための検討会を実施した。この体系表を活用するのは、看護師および看護管理者や教育担当者、大学教員などを想定していたため、看護学研究者、専門看護師、教育的役割を担う看護師で実施し、体系表を洗練した。

#### 【研究3】開発した体系表の信頼性と妥当性の検証

この体系表は、看護師が根拠のある臨床看護実践に向け、自らのILを評価するために使用することを想定していた。そのため、臨床看護師を対象にインターネット調査を実施した。統計分析は、COSMIN Risk of Bias checklistに基づいて行った。

対象看護師は、地域医療支援病院もしくは一般病院に勤務する看護師とした。調査内容は、対象者の基本属性11項目、および作成した体系表の各プロセスにおける行動指標51項目とした。

分析方法は、基本統計量を算出し、作成した体系表の点数化について、51項目の行動指標の「できる/している」項目を2点、「できない/していない」項目を1点として、合計点、平均値、中央値、範囲などを求めた。すべての統計解析にはSPSS statistics 28 for Windowsを使用し、有意水準は両側検定で5%とした。

本調査は、研究者所属機関の倫理審査を受けて実施された。

### 4. 研究成果

研究1では、看護師によってILに相違があること、看護師は文献検討に必要な一連の能力が不十分なこと、看護師が他者から得た情報のエビデンスの検証を十分に行っていないことを明らかにした。看護基礎教育から看護継続教育へと継続したIL教育の必要性が示唆され、その手段として図書館の利活用が考えられた。

研究2では、看護師の実践経験に基づいて、根拠のある臨床看護実践のために必要なILプロセスを「1.入手したい情報の性質と範囲を決定する」「2.入手したい情報に関連する情報を広く閲覧することができる」「3.情報につながる資料等を効率的に入手する」「4.入手した情報を批判的に分析・評価し、情報を整理・保管する」「5.入手した情報を批判的に検討し、看護実践に活用する」の5つに分類し、各プロセスの行動指標を「基礎」「応用」「発展」の3段階51項目で示した。

研究3では、123名の看護師にインターネット調査を依頼し、80名より回答があり、欠損のない71名の回答を分析した。体系表全体のクロンバック係数は $.908$ 、各プロセスは $.445 \sim .872$ であった。また、級内相関係数を算出した結果、 $ICC(1,1) = -.740(-.861 \sim -.536)$ であった。以上の結果は、開発した体系表が信頼性を確保していることを示す。

以上の研究成果から、看護師のICTを活用した情報活用行動に必要なIL獲得に向け、看護基礎教育から看護継続教育へと継続的にIL教育を行う必要があると考える。研究3では、構成概念妥当性の検証が可能なデータ数が得られず、信頼性を確保していることは確認できたが、開発した体系表の因子構造を確認することはできなかった。今後、因子分析の結果もふまえ、各プロセスを構成する項目の確認等、さらなる信頼性と妥当性を検証する必要がある。

また、EBNにおけるエビデンスとは、学会が作成したガイドラインやシステムティックレビュー、メタアナリシスなどを指すが、看護師がそれを理解してエビデンスを活用しているとは言えない現状がうかがえたことから、本来のEBNと実践しているEBNには乖離があることが示唆される。この乖離を埋めるために、EBNとして活用可能なエビデンスレベルの高い研究成果の産出やその活用が可能となる体系表の開発も今後検討する必要がある。

本研究では、根拠のある臨床看護実践のためのIL体系表を看護師の情報活用行動の実態を反映させて作成した。EBNに活用可能なエビデンスレベルの高い研究成果の産出やその活用も含めた体系表に洗練させ、看護師の学習の積み上げに活用することが望まれる。また、図書館の利活用を推奨することが重要であり、看護基礎教育から図書館と教員が協働してIL教育を実施していくことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本千代、野崎真奈美、永野光子
2. 発表標題 臨床看護師の根拠のある看護（EBN）のための情報活用行動の実態
3. 学会等名 日本看護学教育学会第32回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本千代、野崎真奈美、永野光子
2. 発表標題 根拠のある臨床看護実践のための情報リテラシー体系表の開発
3. 学会等名 日本看護学教育学会第33回学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野崎 真奈美  (Nozaki Manami)  (70276658)	順天堂大学・医療看護学部・教授   (32620)	
研究分担者	永野 光子  (Nagano Mitsuko)  (90320712)	順天堂大学・医療看護学部・先任准教授   (32620)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------